

ディベーターは、論題を選ばずに、何でもかんでも議論をするわけではありません。
むしろ予め、議論すべき内容が選ばれていて定まっているからこそ、安心して建設的な議論ができます。

ディベートは定義により、「a: _____ に対して b: _____ と c: _____ に
分かれて行う議論の f: _____」です。この f: _____ の成立のために、下記が大切です。

一番分かりやすい、論題の選定にあたっての注意点は、下記の通りです。

b: _____ / c: _____ のどちらか片方に有利、という論題は、論外(=全くダメ)

どの大会であっても、**論題設定は、ディベートに長けた方が慎重に行います。**また、授業等でのディベートにおける論題の選定は、**論題を設定する人(主に教員)による教育的な配慮が欠かせません!**

議論の余地がある(肯定する可能性も否定する可能性もある)ことをディベータブル(debatable)といいます。まさに、debatable な論題だけを取り扱って debate をしているのです(^_^)

このように、熟考されて選ばれた論題は“**肯定側/否定側の双方に一理ある**”論題となります。

ですから**ディベーターは、論題に対する個人的な賛成・反対の考えとは一致してなくても、どちらの立場からでも安心して、堂々と議論ができる**のです!

- # 日常会話の中で、やたらに「ディベートをしよう」と議論をふっかけてくる人が、全ての話題において
- # “自分と相手との双方に一理ある”テーマで議論をしてくれる、とは思えませんよね(^_^);
- # また「相手を言い負かすのが好きだ」という人がいるかもしれませんが、「ディベートを学ぶことで、相手を言い負かすのが好きになる」のではなく、そういった人は元から「相手を言い負かすのが好き」だったのでしょ。
- # これからディベートを始める方々は、そういった姿勢を持ったディベーターの真似をしないように、切にお願いします。

また、論題が定まっていることと、d: _____ によってスピーチの時間が限られていることから、ディベートのスピーチにおいては、**論題の決着に関係のある話ばかりをする**(例えば「日本は～～すべきである」という政策論題なら、「日本が～～をすべきか否か」ということについての判断材料となる話ばかりをする) こととなります。

そうすると、**論題の決着に関係のない話は、余計な話となるので、そのことに貴重な時間を割く必要はない**のです。例えば、論題に対する個人的な見解は、ディベートの場ですす必要はありません。

- # 上記と同じ例えを用いるなら、**個人的な考えはあるにせよ、日本全体を考えたらどうなるのか?**という点を真摯に
- # 考えて議論を進めるのがディベートという議論の場の本質となります。
- # **議論は問われても個人を問われることがない、という安心感**を持ってディベートに臨んでもらいたいと思います。

日常では、よく喋る人による“コロコロと話題が変わるトーク”に付き合わされるケースがありませんか? そんな時には「振り回されている(-_-;)」と感ずますよね。

一方でディベートは、**論題があるからこそ、落ち着いた、噛み合った議論を、d: _____ に守られた状態で進められる**のです。まさに“**論題こそ命**”です。